学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	小松　奈々 【比較社会文化学専攻　平成22年度生】	本研究は、JFL 環境の中級学習者に対して必要となる会話指導の一つとして「意見交換会話」を取り上げている。話し手としての意見述べの上手さに重点を置く口頭能力ではなく、会話相手とのやりとりを経て実質行動を達成する力であるインターアクション能力（ネウストプニー, 1995）を伸ばしていくことを目指し、五つの研究から韓国語を母語とする中級日本語非母語話者（以下中級 NNS）と日本語母語話者（以下 NS）による接触場面の会話参加の様相を明らかにし、その特徴を基に会話指導の方法を提示した。 研究 1 から研究 4 では、中級 NNS の目標とする話者として超上級非母語話者（以下超上級 NNS）を想定し、中級 NNS の接触場面と超上級 NNS の接触場面の会話データを比較し、中級 NNS の意見交換会話における課題を探った。その結果、中級 NNS は超上級 NNS より「意味交渉」の発話出現数が多く、共有した情報を合成・加工する発話機能である「意見」および「評価」の発話出現数が少ないこと（研究１）、中級 NNS は NS の情報要求に対する応答が多く、NS の発話への同意の発話が少ないために、会話参加が非対称になっていること（研究２）、中級 NNS に個人の体験談をはじめとする状況の説明が多く、意見陳述が冗長になる傾向が見られた一方で、超上級 NNS は簡潔に意見を述べる傾向があり、内容構成においては、意見に対する理由に裏づけをする、主張を明確化したり限定したりすること（研究３）、会話相手と同意見の場合は、両群の同意表現の出現頻度は同程度だったが、中級 NNS が相づち的な発話による同意表現を多用しているのに対し、超上級 NNS は実質的な発話によるものと相づち的な発話によるものを使い分けていること及び会話相手と異なる意見の場合は、中級 NNS では同意表現をほとんど用いていない様子が観察されたのに対し、超上級 NNS は全面的な同意ではないという信号を送りつつも同意表現を用いていること（研究４）が明らかにされた。研究 5 では、研究 1 から 4 で得られた結果を基に実践授業を行い、接触場面の会話ルールおよび聞き手としての役割の観点から学習者の意識の変容について論じた。 以上の結果から、今後の中級学習者への指導として、自身が参加する会話の状況に合わせた発話を行うという社会言語能力を養成し、適切な意見交換の場の提供で学習者の持つ社会文化能力を引き出すことにより、相手との協力のもとに会話に参加していくインターアクション能力が身につくと指摘している。
論 文 題 目	接触場面の意見交換会話における日本語中級非母語話者の会話参加の様相－インターアクション能力養成のための会話指導に向けて－	
審 査 委 員	（主査）　教授　佐々木　泰子	
	教授　森山　新	
	准教授　西川朋美	
	教授　伊藤　美重子	
	准教授　田崎　敦子	